

平成 24(2012)年度
知床国立公園知床五湖等利用適正化検討業務
報告書



平成 25(2013)年 3 月

環境省釧路自然環境事務所
公益財団法人 知床財団

報告書概要

1) 事業名

平成24年度 知床国立公園知床五湖等利用適正化検討業務

2) 事業の背景・目的

本業務では各々の課題を協議する場である「知床五湖利用のあり方協議会」、「知床五湖の利用のあり方協議会登録引率者審査部会」、「適正利用・エコツーリズム検討会議カムイワッカ部会」を運営し、両地区の適正利用に関し地域関係団体等との協働による課題解決に向けた合意形成を図ることを目的とする。

3) 事業実施体制

本業務は、環境省からの請負事業として公益財団法人知床財団が実施したものである。

4) 事業の実施概要

(1) 協議会等の運営等

協議会等日程調整、会場の手配、配布資料の準備、議事概要等の作成、当日の会場準備、専門家への旅費・謝金の支払い等を行った。

i 知床五湖の利用のあり方協議会の運営

知床五湖の利用のあり方協議会は、平成24年12月19日、平成25年1月28日の計2回斜里町ウトロで開催した。

ii 知床五湖の利用のあり方協議会登録引率者審査部会の運営

知床五湖の利用のあり方協議会登録引率者審査部会は、平成24年11月21日、12月10日、平成25年1月22日、3月19日の計4回斜里町ウトロで開催した。

iii 適正利用・エコツーリズム検討会議カムイワッカ部会の運営

適正利用・エコツーリズム検討会議カムイワッカ部会は、平成25年3月26日に斜里町で開催した。

(2) 学識経験者への聞き取り調査の実施

学識経験者への聞き取り調査は、事前に担当自然保護官(ウトロ自然保護官事務所 野川裕史上席自然保護官)と打ち合わせを行い、聞き取り調査の方針、項目のすり合わせを行った上、平成25年1月18日に札幌で実施した。この聞き取り調査の結果をまとめ、平成25年1月28日の第28回(平成24年度第2回)協議会資料として取りまとめた。

目次

1. はじめに	1
2. 知床五湖の利用のあり方協議会の運営	2
2-1 第27回(平成24年度第1回)協議会実施結果	3
2-2 第28回(平成24年度第2回)協議会実施結果	9
3. 知床五湖の利用のあり方協議会 登録引率者審査部会の運営	17
3-1 第13回(平成24年度第1回)登録引率者審査部会実施結果	18
3-2 第14回(平成24年度第2回)登録引率者審査部会実施結果	22
3-3 第15回(平成24年度第3回)登録引率者審査部会実施結果	26
3-4 第16回(平成24年度第4回)審査部会実施結果	29
4. 知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズム検討会議カムイワッカ部会の運営	32
4-1 第1回(平成24年度第1回)カムイワッカ部会実施結果	33
5. 学識経験者への聞き取り調査	41

付録

付録1 第27回(平成24年度第1回)協議会資料	
付録2 第28回(平成24年度第2回)協議会資料	
付録3 第13回(平成24年度第1回)審査部会資料	
付録4 第14回(平成24年度第2回)審査部会資料	
付録5 第15回(平成24年度第3回)審査部会資料	
付録6 第16回(平成24年度第4回)審査部会資料	
付録7 第1回(平成24年度第1回)カムイワッカ部会資料	

1. はじめに

知床国立公園では、原始性の高い自然や野生動物とのふれあいを求める利用ニーズの増大と利用の多様化に伴い、利用者の集中や不適切な利用に伴う自然環境への悪影響が懸念されている。

特に、知床国立公園道道知床公園線の幌別以奥においては、知床五湖、カムイワッカ湯の滝といった知床を代表する自然観光資源があり、年間 50 万人もの観光客の利用が見られる中で、ヒグマとの軋轢や利用の集中・渋滞発生などの課題を抱えている。

知床五湖においては平成 23 年度より、知床五湖利用調整地区制度を活用した利用のコントロールの開始や、知床五湖からカムイワッカに至る道道における新たなマイカー規制の制度運用の実施といった利用適正化対策を図っている。それぞれの制度運用については順応的な対応を図るため、平成 23 年度から平成 25 年度の制度実施結果をもとに平成 26 年度からの次期運用について検討することが求められており、その検討については本年度より開始することとしている。

本業務では、各々の課題を協議する場である「知床五湖利用のあり方協議会」、「知床五湖の利用のあり方協議会登録引率者審査部会」、「適正利用・エコツーリズム検討会議カムイワッカ部会」を運営し、両地区の適正利用に関し地域関係団体等との協働による課題解決に向けた合意形成を図ることを目的として実施した。

2. 知床五湖の利用のあり方協議会の運営

平成 24 年度の知床五湖の利用のあり方協議会は、平成 24 年 12 月 19 日、平成 25 年 1 月 28 日の計 2 回、斜里町ウトロで開催された。

会議前の主な業務として、会議開催日の調整、会議場の手配、協議会構成員への出欠確認を行い、出席者名簿作成、会議資料の印刷、及び座席表作成を行った。会議当日には、座席表に合わせた机の配置、ネームプレート設置を含む会場の設営を行ったほか、1月28日は札幌から招聘した専門家2名の空港から会場までの送迎を行った。会議後には、専門家への旅費、及び謝金の支払いを行ったほか、議事録を作成した。

2-1 第27回（平成24年度第1回）協議会実施結果

実施日時

平成24年12月19日（水） 14:00-16:30

実施場所

知床世界遺産センター レクチャールーム



写真 2-1. 第27回協議会の様子

議事次第

環境省釧路自然環境事務所次長挨拶

- (1) 平成24年度知床五湖登録引率者登録試験結果報告
- (2) 平成24年度知床五湖利用調整地区制度実施報告及び意見交換
- (3) その他

出席者名簿

協議会構成員		
NPO 法人知床斜里町観光協会	木幡 純一郎	
	新村 武志	
知床エコツーリズム推進協議会	上野 洋司	
知床民宿協会	梅沢 欣也	
斜里バス	下山 誠	
ユートピア知床	上野山 文男	
ウトロ自治会	梅沢 征雄	
知床ガイド協議会	山本 泰寛	
ウトロ地域協議会	松本 鉄男	
	佐藤 正悟	
しれとこ・フォーラム21	吉川 和成	
	小川 佳彦	
事務局		
環境省釧路自然環境事務所	次長	中山 隆治
同	ウトロ上席自然保護官	野川 裕史
同	ウトロ自然保護官	山岸 隆彦
北海道オホーツク振興局環境生活課	課長	石川 誠
斜里町役場 総務部環境課	課長	岡田 秀明
同	自然環境係長	高橋 誠司
同 産業部商工観光課	観光係長	伊藤 智哉
運営事務局		
公益財団法人 知床財団	事務局次長	寺山 元
同	普及研修係主任	秋葉 圭太
同	普及研修係	佐藤 舞子

議事概要

(1) 平成 24 年度知床五湖登録引率者登録試験結果報告について

- 冒頭に環境省中山次長より開会あいさつ。
- 環境省野川が資料 1-1、資料 1-2 を内容に沿って説明。

質疑応答

しれとこ・フォーラム 21 (小川) : 既存の登録引率者が来年度の登録をしなかったケースはあるのか。

知床財団(寺山) : 知床でガイドはするが、登録引率者としての登録をしなかった者はいる。健康上の理由等もある。

斜里観光協会(木幡) : 新規引率者の募集方法と周知はどのように行っているのか。

環境省(野川) : 例年、新規養成の募集を4月からプレスリリースし、ホームページへの掲載も含め広報している。養成にあたっては、事前説明会、各種講習会、登録引率者の下で行うインターン、五湖内外での自主的な引率研修を経て受験資格を得る仕組みだ。

エコツーリズム推進協議会(上野) : 新規登録者が少ない。地域外からの参入はないのか。引率者の数を増やすためには、受験しやすい環境が必要なのでは。

環境省(野川) : 本年度の受験者は全員ウトロ地域を拠点としてガイドを行っている者だ。網走在住の者からも問い合わせがあり応募したものの、研修日程の折り合いがつかず受験を断念した。登録引率者の養成については、応募しやすい環境作りが課題だ。講習会の回数を増やすなど柔軟な体制作りをしたい。

環境省(中山) : 資料 1-2 の通り、平成 25 年度知床五湖登録引率者を承認してもよろしいか。

一同 : 承認。

(2) 平成 24 年度知床五湖利用調整地区制度実施報告及び意見交換

- 資料2～資料4の内容について、環境省野川が要約したスライドショーを用いて説明。

質疑応答 ヒグマの出没状況と対策について

しれとこ・フォーラム 21 (小川) : 本年度のヒグマの大量出没の状況については理解。大量出没の原因と来年の見通しについてどう考えるか。また、ヒグマの個体数の正確な把握は行われているのか。

知床財団(寺山) : 夏期の餌資源が非常に乏しかったことが第一の原因と考える。また、例年よりマスの遡上が大きく遅れたことも大きな要因。正確な個体数の把握には至っていない。

温泉旅館協同組合(小川) : ヒグマに関する情報や対策等の実情をもっと地域に提供すべき。ヒグマの高密度化、馴化に対する対策はどのように考えるのか。ヒグマは観光資源とも捉えられるがあるが、地域住民との軋轢問題もある。

環境省(中山)：平成 22 年にヒグマ保護管理検討会議を設置し、平成 24 年 3 月にヒグマ保護管理方針を策定した。今後 5 年をかけ、モニタリングし、ヒグマの動向を把握する計画である。

ただし、今後のあり方については議論の積み残しがある。クマを積極的に捕獲するのか、非致死的な手法で折り合いをつけるのか、等のいくつかのシナリオの中から意思決定する必要がある。行政コストや世界遺産としてのブランド価値等を考慮する必要がある。

エコツーリズム推進協議会(上野)：クマ側の人間に対する認識が変化した。クマは人を天敵とは考えていない。しかも、変化の速度が非常に速いのではないか。こうした現状認識に立てば、取り返しがつかなくなる前に、先を見越した対策が急務。

環境省(中山)：今年のヒグマ出没状況は特異な現象と考える。継続的に続くとは認識していない。出没数も数年おきにピークがあり、変動する。単年度の状況にとらわれ過ぎるべきではない。ある程度長期的なモニタリングに基づいた保護管理が必要。

斜里町(岡田)：ヒグマ目撃件数でみると、例年 800 件程度であるが、本年は 1700 件を超えた異常な事態。しかし、五湖の利用者数の総数は増加した。この結果は、新制度の成果と評価したい。特に高架木道とヒグマ活動期のガイドツアーの存在は大きい。制度導入以前の状態で、仮に本年のような異常事態が発生したとすれば、五湖は全く利用できず、知床全体の観光客数にも大きく影響したと想像する。

知床財団(寺山)：五湖は、知床国立公園の中でヒグマ対策が最も進んでいる場所。ガイドツアーやレクチャーにより、ヒグマに関するリスク対策が制度として実施できているからこそその成果だ。

斜里観光協会(木幡)：利用者からは、高架木道でヒグマが見られてよかったという感想もある。五湖の施設が安全であると認識されていてよかった。

エコツーリズム推進協議会(上野)：五湖のガイドツアーのみでガイド事業者の採算は成り立たないのでは。ヒグマの出没が増加し、ツアー中止が多発した場合、登録引率者をやめてしまうといった事態は考えられるか。引率者から不安や不満の声は上がっていないのか。

環境省(野川)：登録引率者とは年に 3 回程度遭遇時の状況を検証するミーティングを実施し、五湖におけるヒグマのリスク回避に関して話し合っている。五湖以外についてはガイドも環境省も互いに踏み込んだ話はしていない。

しれとこ・フォーラム 21(吉川)：保護管理方針を作ったということだが報告会等をもっと行えないか。地域で生活をし、事業を行っている身としては、ヒグマに関する最新情報やリアルタイム情報も提供してほしい。ヒグマに関する情報公開をもっと進めてほしい。

環境省(中山)：斜里町においてもウトロ地区においても住民説明会等を頻繁に実施しているが、参加者は少ない。住民のヒグマに対する意識にはばらつきを感じる。住民による不適切な習慣や行動もある。

しれとこ・フォーラム 21(小川)：五湖の利用者数は増えているということから、高架木道とガイドツアーは評価。しかし、高架木道から常にヒグマが見えており、観察場所となっているような現状は望ましくない。動物園やサファリパークのような印象で知床らしい利用のあり方ではない。また、人慣れが進行し、市街地出没にも繋がる可能性がある。

環境省(中山):高架木道からヒグマを安易に見せることに賛成するわけではない。五湖で人馴れしたヒグマが市街地に侵入する危惧についても理解。

しれとこ・フォーラム 21(吉川):クマの人慣れは従前から指摘されてきた。人側のクマ慣れも顕著。

環境省(野川):エコツーリズム検討会議において、観光協会提案のエサやり禁止キャンペーンなどを展開している。観光関連の関係者と共に、啓発していきたい。協力をお願いしたい。

質疑応答 五湖園地の施設等に関する課題・要望

斜里観光協会(木幡):高架木道には日影がない。炎天下における子供お年寄りの利用に不向き。最終展望台に東屋やパーゴラを作るといった対策をとれないか。

環境省(野川):気象条件等により、常設のものは技術的に困難。

斜里観光協会(木幡):評価アンケートのサンプル数が少ない。1000 は必要では。

環境省(野川):統計学的に回収数が 100 くらいであれば適正との専門家から助言を得て実施した。次回に専門家を招集し、説明する予定。

しれとこ・フォーラム 21(小川):最終展望台から地上の湖畔に降りる場所を作れないか。地面に立った実感が重要。

しれとこ・フォーラム 21(吉川):携帯電話の電波環境の改善を要望。

知床財団(寺山):フィールドハウスでのネット環境も不安定。携帯電波施設のウトロ全体の許容量に起因する構造的な問題。

環境省(野川):公園法の地区区分上、大規模なアンテナを立てることは困難。景観を崩すことにもなりかねない。既存施設に付随した小規模なアンテナであれば可能性もある。

質疑応答 来年度以降の制度見直しについて

環境省(中山):今後の制度見直しについて意見はあるか。

エコツーリズム推進協議会(上野):ヒグマ活動期の増枠実験結果の説明をしてほしい。

環境省(野川):資料 4 に沿って内容を説明。増枠実験について利用者アンケートにおいて大きな問題は見られなかった。一方、指定認定機関の業務は改善が必要との結果。審査部会において、来年度のヒグマ活動期の実験案を議論中。優先順位を立て実験を行い、平成 26 年度以降の制度改変へ反映したい。登録引率者は当初、利用者の代表者という位置付けであったが、引率者の責務を明確にすることで自由度を高めることが可能と認識。

ウトロ自治会(梅沢):ヒグマ活動期において散策希望者がいるのに引率者を紹介できない場合があると聞いた。引率者の数が足りないのでは。羅臼側のガイドに登録引率者は居ないのか。地域外の参入を促すことが必要。

環境省(野川):引率者を安易に増やすことは困難。引率者の質の問題もある。ガイド業で生計を立てることのできる人数には限界がある。

環境省(中山):ツアー中に事故が発生した場合、ボランティアガイドでは賠償責任に対応できない。必ずしも、ガイドの数をそろえればすべて解決するわけではないと考える。

しれとこ・フォーラム 21(小川):引率者資格を自由度の高い登録制として、要望に応じて引率できる体制を構築しては。中高年を含めボランティア的な運用を図れば、斜里町にはヒグマ対処ができる人材が多いはず。

環境省(野川):ガイド事業所内でガイドを育成する際にバックアップをするアイディアも考えられる。

質疑応答 認定手数料のありかたについて

しれとこ・フォーラム 21(吉川):認定手数料は安くならないのか。ヒグマ活動期と植生保護期で料金が異なるので収入が多く黒字で運営できているのであれば、2つの期間を同額にする議論があってもいいと思う。黒字分は、町民や観光客に還元すべき。

知床財団(寺山):公益法人の会計制度上、繰り越しやプールはできない。その年の収入は同年に何らかの事業に使用している。地域に還元できるような取り組みは努力している。

環境省(野川):次回以降の会議において、収支報告と併せ、認定手数料の意見も受けたい。

(3)その他・連絡事項

○構成メンバー変更の際は届け出が必要。

○次回協議会は1月28日を予定。

2-2 第28回（平成24年度第2回）協議会実施結果

実施日 平成25年1月28日（月）14:00-16:30

実施場所 知床世界遺産センター レクチャールーム



写真 2-2. 第28回協議会の様子

議事次第

環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所次長挨拶

- (1) 平成24年度モニタリング調査の結果について
- (2) 知床五湖登録引率者審査部会報告
- (3) 利用促進・広報戦略部会(ウェルカム部会)報告
- (4) その他

出席者名簿

協議会構成員		
NPO 法人知床斜里町観光協会	木幡 純一郎	
	新村 武志	
知床エコツーリズム推進協議会	上野 洋司	
知床民宿協会	桂田 鉄三	
斜里バス	下山 誠	
ユートピア知床	千葉 修	
ウトロ自治会	梅沢 征雄	
知床ガイド協議会	山本 泰寛	
ウトロ地域協議会	松本 鉄男	
事務局		
環境省釧路自然環境事務所	次長	中山 隆治
同	ウトロ上席自然保護官	野川 裕史
同	ウトロ自然保護官	山岸 隆彦
北海道オホーツク振興局環境生活課	課長	石川 誠
同	自然環境係長	大宮 久俊
斜里町役場 総務部環境課	課長	岡田 秀明
同	自然環境係長	高橋 誠司
同 産業部商工観光課	観光係長	伊藤 智哉
運営事務局		
公益財団法人 知床財団	事務局次長	寺山 元
同	普及研修係主任	秋葉 圭太
同	普及研修係	佐藤 舞子
専門家		
北海道大学大学院農学研究院	准教授	愛甲 哲也
同	同	庄子 康

議事概要

環境省(中山):開会挨拶

(1-1)平成24年度モニタリング調査の結果について

- 知床財団秋葉が資料1-1に従い、五湖植生・歩道浸食モニタリング調査、利用のアンケート調査、渋滞調査の結果を報告。

質疑応答

環境省(野川):観光協会に質問するが、今年度の10月は斜里町の宿泊者数が好調だったが、理由をどう考えるか。

斜里観光協会(木幡):特に理由はないと考える。昨年は震災の影響により大きく落ち込んでおり、その回復分と考えられる。特に昨年度の10月の入り込みは少なかった。

環境省(野川):この10月は遺産センターなどでアジア系の来館者が多く見られたが、宿泊数にも反映したということか。

斜里観光協会(木幡):今年度は総じてアジア系の来訪者の宿泊数は減少しているが、10月に少し回復が見られた。

知床財団(秋葉):今年度の10月の連休は好天で、知床五湖の利用者数は多かった。五湖では、今シーズン2番目に深刻な渋滞が10月に発生している。

ユートピア(千葉):10月は船の欠航が多かった。

知床財団(秋葉):船の欠航と五湖駐車場の渋滞発生日が重なっている日もある。

ガイド協議会(山本):個人と団体の関係はどうか。どちらの伸びが貢献しているのか。団体利用者の伸び率と利用総数の関係は。

知床財団(秋葉):月によって傾向が異なるが、総じて今年の五湖では、自家用車(個人利用者)が伸びている。9月、10月は団体利用者が伸びた。

環境省(野川):夏休み期間は個人が多く、9月、10月は団体が多い傾向だ。過去の渋滞指数を見ると、9月の渋滞は、船の欠航や祝祭日等の連休が影響している。

ウトロ地域協議会(松本):地上歩道上に敷いている木道の整備状況はどうか。すれ違い等で植生が傷つきやすい箇所での対策はどうしているか。

オホーツク振興局(大宮):11月に、廃道となった1湖畔の木道を撤去する工事を行い、不要となった材木を用いて地上遊歩道入口～第5湖間のぬかるみ対策を行った。来年度開園前にまた状況を確認する予定だ。

ウトロ地域協議会(松本):2湖周辺の浸食が気になるが、対策はどうか。

自然公園財団(古坂):雨が降ったときは、従来通り湖に流せるところは水切りをして対策を行っている。現時点において2湖周辺では、水たまりの水を湖に流し込む方法しかない。

ウトロ地域協議会(松本):では、2湖周辺は木道を敷く等の対応は行っていないということか。遊歩

道の浸食防止の観点から、早めの対策が必要と考える。

オホーツク振興局(大宮):雪が溶けたら状況確認を行い、できるものに関しては早めに対応したい。

(1-2) 知床五湖の利用者意識の比較と渋滞予測について

- 知床五湖来訪者の意識調査とその経年比較、知床五湖駐車場の渋滞予測について北海道大学愛甲先生よりパワーポイントおよび資料1-2を用いて説明。

質疑応答

ウトロ地域協議会(松本):凡例の表現は、設問内容に即した表現にしたほうが分かりやすい。

愛甲先生:そのように改めたい。

ウトロ地域協議会(松本):外部要因(船の欠航など)と五湖駐車場の渋滞との関係性についての検討はしているか。関連性が充分にあると思われる。

愛甲先生:データがあり分析可能と思われるので、今後検討対象としたい。ただし、観光船が欠航した日は必ず渋滞が発生するかというと、そうではない。遊歩道が散策できないほど悪天の際は当然、五湖の来訪者数も減少する。例えば、晴れていても強風等で観光船が欠航した時などに駐車場の渋滞が発生する傾向がある。渋滞の要因は複合的に考える必要がある。また、マイカー規制期間外や、五湖の地上遊歩道が閉鎖している際には、カムイワッカが渋滞する傾向がある。こうした要因等も併せて検討したい。

エコツーリズム推進協議会(上野):ガイドの駐車車両は渋滞に影響しているか。

愛甲先生:ガイドの車両は、駐車台数全体からみると少数であり、影響が少ないとの理由で分析対象ら除外している。ガイドの車両が渋滞の要因という可能性は低く、逆にガイドツアーの参加者がそれぞれ五湖まで自家用車で来訪した場合、渋滞を加速させる可能性がある。ヒグマ活動期は、駐車時間が長い、全体でみると大きな関連性は見出せない。

ガイド協議会(山本):外構工事により、ガイド車両用の駐車スペースが設けられたことから、駐車時間の実質増にはなっていないのではないかと。

環境省(野川):現状では、ガイドによる送迎ではなく、五湖現地集合というツアーもある。ツアー参加者の平均滞在時間は4時間と長く、自家用車で集合した場合渋滞を加速させている可能性がある。

ユートピア(千葉):渋滞緩和のため循環バスの活用といったアイデアもある。

環境省(野川):循環バスを考える際、乗り換え場所の課題があるだろう。今年度マイカー規制時、自然センターの駐車場が混雑した。これはヒグマ出没などにより地上遊歩道が閉鎖した際に、ガイドが(五湖以外を案内するために)自然センターを集合場所にしたため。このような時に自然センターの駐車場があふれた。渋滞を緩和できるような全体的なシステムの検討も必要。

ユートピア(千葉):利用時間帯の分散により渋滞が緩和するとすれば、早朝の時間帯への誘導も渋滞緩和となり得るか。日照時間が長い時期は早朝をうまく利用するとよいのではないかと。

愛甲先生:そういった誘導の仕方もある。現在も行われている渋滞予測カレンダーのような情報をもっと浸透した場合、どのような時間帯、条件に利用者の行動が変化するか、分析・検討する余地がある。

愛甲先生:年齢も関係しているが、情報源が行動に影響している。団体客は、旅行会社やバスガイドからの情報がメイン。自然観察派は若い層が多く、インターネットからの情報がメイン。

ユートピア(千葉):夜の動物ツアーのように、斜里バスなどが早朝トレッキングなどを行うことで、多くの利用者を誘導できるのではないかな。そうすることで、午前中の渋滞を緩和できるのではないかな。

(1-3) 知床五湖を訪問しなかった旅行者の意識について

- 知床を訪れた利用者への意識調査等の結果について北海道大学庄子先生よりパワーポイントおよび資料1-3を用いて説明。

質疑応答

庄子先生:今回の調査は郵送回収法で行っているが、アンケート配布時に訪問先については口頭で聞き取りを行っているため、アンケート対象者の行動についてはほぼ把握している。今回の結果には含めていないが、旅行者の行動分析については今後検討したい。

斜里観光協会(木幡):調査の実施場所は、宿泊場所が一番よいと思う。

庄子先生:自分で声をかけて行ったので、公共の場を選んだ。

斜里観光協会(木幡):協会で協力もできるので必要な際には声をかけてほしい。

(2) 知床五湖登録引率者審査部会からの報告について

- 環境省野川が資料2-1、2-2に従い内容を説明。

質疑応答

環境省(中山):来年度ヒグマ活動期の実験期間は決まってないのか。

環境省(野川):まだ決まっていない。期間を通じて、それぞれの時期に即した実験を行う予定だ。

ガイド協議会(山本):ヒグマ活動期においては、ガイド協議会は当日受付カウンターを設置する等の対応を行ってきた。当日散策を希望する利用者に対し、すべての柵がいっぱいで紹介出来ないことも多かった。増柵になれば、利用機会の拡大につながるはずだ。柵が埋まってしまうと紹介はできないが、当日受付カウンターの運営コストはかかる。利用者へのサービスという面と当日カウンターの継続性という面を考慮し、増柵と専用柵の割り当てをお願いしたい。

環境省(野川):当日受付カウンターについては、本年度の収支はマイナスだった。一方、当日受付カウンターによるサービスの評判は良い。今後の方針については、登録引率者とガイド協議会で協議中だ。

ウトロ地域協議会(松本):実験案の中身が詳しくわからない。登録引率者の意見は反映しているのか。

環境省(野川):審査部会においては、3名の登録引率者が代表として出席し、意見交換している。現役の引率者からは、ツアーの静寂感を確保したいという意見が多く、追い越しや2ルート併用といった実験案については否定的であり、増枠実験について前向きな意見だった。まず、切実な問題となっている枠数の限定を解決するために増枠実験を行い、その状況を見ながら他実験を進めていく予定だ。

ガイド協議会(山本):登録引率者側からの提案をベースに議論を行っている。

環境省(野川):当日受付カウンターへの専用枠割り当て等の課題についても、登録引率者の代表とガイド協議会が協議し、部会に提案された。

ウトロ自治会(梅沢):4つの実験案のなかで、増枠実験のみ実施の方向だが、他の3つの実験案も継続審議にすべきではないか。

環境省(野川):増枠実験に着手した後、他の3つの実験案についても検証していく姿勢だ。

環境省(中山):事務局である環境省は、他の3つの実験案についても前向きに検討する意向だ。今日は、こうした方向性についても承認いただきたい。

ウトロ自治会(梅沢):現状のヒグマ活動期のルールは、かなりきつい規制と考える。2年間実際に運用をしてきたことで、4つの実験案に対応する課題が指摘されている。小ループ案(2ルート併用案)は時間のない利用者にとってかなり魅力があるのではないか。

ガイド協議会(山本):2時間でツアーを行う実験案は、団体客も利用できる可能性が広がる。一方、登録引率者の数や安全確保、静寂性の確保等さまざまな課題が指摘され、実施が難しいという結論に至った。

エコツーリズム推進協議会(上野):登録引率者が増えれば実施できる可能性はあるが、現時点では難しいということか。

環境省(中山):この制度ができたそもそもの理由(ヒグマとのトラブル回避や混雑感の解消など)がぶれなければ、今後制度が変わっていく可能性は十分ある。柔軟に対応していきたい。

環境省(野川):2ルート併用案については、静寂性の確保と混雑感の変化がネックだ。そもそも五湖の地上遊歩道に何を求めるのか、についての議論も必要。

環境省(中山):これで終わりとは全く思っていない。じっくり議論しながら進めていきたい。来年も再来年もどんどん検討を進めたい。

斜里観光協会(木幡):利用者へのアンケート等から評価を把握しているのか。

環境省(野川):五湖 FH からの日報によって利用者からの評価や意見などは把握している。課題を前提に議論をしているが、すべて利用者のニーズに応えられるわけではない。

斜里観光協会(木幡):現状のヒグマ活動期の利用方法ではリピートしなくなる恐れがある。枠の問題のみならず、利用方法の多様化に目を向けてほしい。

ウトロ自治会(梅沢):知床の楽しみ方としていろいろな提案が必要。多様な楽しみ方が可能なルールを整備し、利用者にサービスすることが私たちの義務。

ガイド協議会(山本):枠が増えて登録引率者が増えないと、さまざまな問題が発生する。五湖すべてを周るか、五湖そのものに行かないか、という選択肢になっている印象。第2湖だけ見たい人にも

対応すべき。小ループのほうがヒグマとの遭遇率は低いと仮定すれば、引率は現在のような研修を経て登録される登録引率者に限らなくてもよいのではないか。また、実験枠ということで登録引率者に限定しないという考え方もある。

ウトロ自治会(梅沢):ヒグマ出没により大ループが閉鎖した場合、2ルート併用案では小ループのみ開放ができるという考え方もあるのか。

環境省(野川):2ルート併用案は、回転率が高くなるため、登録引率者が足りなくなる恐れが強いが、5月などの閑散期においては様々な実験を行うことができ、利用者のニーズや評価も明らかにできるのではないか。

知床財団(秋葉):現状のヒグマ活動期の利用方法は、五湖すべてを周る3時間のツアーか高架木道のみという両極端な選択肢しかない。現場の感覚としても、中間の手軽さを求めるニーズは存在すると感じる。一方、利用者のニーズは常に多様であり、これに対応し続けると五湖の利用のコンセプトそのものが揺らぐ恐れがある。利用者のニーズに応えるのではなく、あるべき利用の体験を地元から提案する姿勢も必要。

ガイド協議会(山本):増枠は静寂な五湖の体験と相反する。調整は非常に難しい。どこまでも多様化するの難しいが、極端すぎるのもどうか。

環境省(中山):五湖の利用制度は、ヒグマ対策・植生保護・静寂感確保を目的とした制度なので、それを見失っては元も子もない。知床五湖のブランドイメージを確保しつつ、各種実験を進める姿勢が必要。

ガイド協議会(山本):制度開始前から五湖すべてを周回する利用者の割合はそこまで多くなかった。高架木道の終点から地上遊歩道に少しだけ降ろすだけで満足するのではないか。

ウトロ地域協議会(松本):来期に各種実験を実施し、検討する方向に賛成だ。

環境省(中山):各種実験については審査部会で議論するとして、まず、来期増枠実験を実施すること、その際に当日受付カウンターに専用枠を割り当てることに関して承認いただけるか。

一同:承認

(3)利用推進・広報戦略部会(ウェルカム部会)からの報告について

- 知床財団寺山が新規キャンペーン企画「クマレク見て得 キャンペーン」企画について資料3を用いて説明

質疑応答

ガイド協議会(山本):ヒグマレクチャーについて、より広くより多くの来訪者に見て頂く、という目的ならば、レクチャーを行える人を広く認定し、ホテル等様々な場所で事前に実施することはできないのか。知床に来る観光客のリピーター率は、実はあまり高くないため、宿泊施設などで利用者に五湖で受講するレクチャー映像などを見せて事前情報を与え、五湖とはどのような場所か、制度への理解向上を目指すべきではないか。これはクレーム対策にもなる。五湖以外で事前に映像を見せることはできないか。

環境省(野川):可能性はあるが課題は多い。

知床財団(寺山):個人的には、多くの方が見ることの効果はあると思う。ただし、現行の制度では想定されていない。

ウトロ地域協議会(松本):(レクチャー受講済みの情報等を)どこかで一元化できればよいのではないか。

ガイド協議会(山本):ヒグマ対策についての趣旨は十分理解、賛同するものだ。事前に五湖以外の場所で実施することで混雑緩和等の効果も期待できる。なぜできないのか、理由を教えてほしい。

斜里バス(下山):今後の検討事項とし、今後実現可能性について協議すべきではないか。

環境省(中山):ビデオの映像については、著作権などの縛りがあり外部での上映はできない状況だ。

環境省(野川):レクチャーへのご意見は伺うが、この新規キャンペーンを行うことについては賛同いただけるか。

一同:協賛店がなければ始まらない。早めに着手すべき。

斜里バス(下山):とりまとめは、知床財団が行うのか。

知床財団(寺山):その通りだ。

環境省(中山):キャンペーン企画については、承認でよろしいか。

一同:承認

(6)その他・連絡事項

ウトロ地域協議会(松本):五湖の駐車場拡張計画についての進捗はどうか。

環境省(中山):環境省として前向きに検討しているところだ。

ウトロ地域協議会(松本):詳細な計画については、協議会の場で諮られるという理解でよいのか。

環境省(中山):検討は進んでいるが、細かいことは未定だ。ただし、拡張工事は地形等の要因により大方の計画が決まってしまう。いくつかハードルがあるので、協議会で議論しながら進めたい。

○ 次回:3月ごろ開催予定

○ 閉会挨拶

3. 知床五湖の利用のあり方協議会 登録引率者審査部会の運営

平成 24 年度の知床五湖の利用のあり方協議会登録引率者審査部会は、平成 24 年 11 月 21 日、12 月 10 日、平成 25 年 1 月 22 日、3 月 19 日の計 4 回、斜里町ウトロで開催した。

会議前の主な業務は、会議開催日の調整、会議場の手配、部会構成員への出欠確認を行い、出席者名簿作成、会議資料の印刷、及び座席表作成等である。会議当日には、座席表に合わせた机の配置などの会場設営を行った。会議後には、議事録の作成を行った。

3-1 第13回（平成24年度第1回）登録引率者審査部会実施結果

実施日時

平成24年11月21日（水） 14:00～17:00

実施場所

知床世界遺産センター レクチャールーム

議事次第

- (1) 来年度以降のヒグマ活動期の運用について
- (2) 平成24年度登録引率者登録試験について
- (3) その他

出席者名簿

登録引率者審査部会構成員		
NPO 法人知床斜里町観光協会	新村 武志	
知床ガイド協議会	山本 泰寛	
知床五湖登録引率者代表	松田 光輝	
同	鈴木 謙一	
同	若月 識	
エコツーリズム推進協議会	寺山 元	
事務局		
環境省ウトロ自然保護官事務所	上席自然保護官	野川 裕史
同	自然保護官	山岸 隆彦
北海道オホーツク振興局環境生活課	自然環境係長	大宮 久俊
斜里町役場 総務部環境課	課長	岡田 秀明
同	自然環境係長	高橋 誠司
運営事務局		
公益財団法人 知床財団	保護管理研究係主任	葛西 真輔
同	普及研修係主任	秋葉 圭太
同	保護管理研究係	能勢 峰

議事概要

議題1 来年度以降のヒグマ活動期の運用について

1-1. 知床五湖ヒグマ活動期増枠検討にかかるアンケート調査の報告。

資料説明

- 増枠実験時と通常時との比較において、利用者の感想に明瞭な差異はほとんど見られない。利用者の体験の面からの課題は特に認められない。
- アンケート実施日の天候やツアーの催行状況がアンケート結果に及ぼす影響を確認したが、実験期間と通常期間で上記条件で大差はなく、それらの影響を確認することはできなかった。

1-2. 増枠に関する意見交換結果

資料説明

1) 登録引率者代表の意見

- ヒグマのいる場所を安全に歩く機会が確保される、という前提の共有化が必要。
- 引率者が安全確保の主体であるという整理が必要。
- これらの整理の上、増枠を実施し、同時滞在枠制限の撤廃を希望。

2) 五湖 FH の意見

- 利用ニーズの面や手数料収入の面から増枠の必要性は理解。
- ただし、本部機能については限界になる恐れが強く、対策が必要。
- 同時に、当日受付に加え統一的な予約受付窓口が必要。

質疑・意見

- 引率者のツアー＝絶対安全ではなく、ヒグマというリスクを下げる仕組みを引率者のツアーは持っており、ヒグマがいる知床五湖を歩くという中で高架木道の利用と共に情報提供し、利用者に選択してもらうことが肝要。
- 施設の開放・閉鎖の管理権限は行政が持つ。ただし、登録引率者が開放・閉鎖の判断に必要な知識・技術を有するまでレベルが上がれば、安全性は高まる。判断をするための情報を提供する者が現在の知床財団のみから増えることはよいこと。
- 現状では、登録引率者＝利用者代表という整理。これを再定義し、管理者としての機能や権限を持たせるべきか、根本的議論が必要。
- 2年間の実績を前向きに評価し、平成26年以降の制度再編について議論を進め、協議会に図るべき。
- 利用者ニーズを満たすためのボトルネックがどこにあるのか、ということについて整理必要。枠数がボトルネックならば拡張すべき。
- 将来像を部会内で共有する中で、必要な検討事項を進めていくべき。増枠をはじめとした

制度変更が官報告示等の行政手続きのために柔軟にできないのであれば、規則はあえて緩く設定した上で、協議会で議論・設定すればよい。

- 来年度の実施を見越せば、官報告示の手続き上増枠部分を先行して進める必要がある。

まとめ

- 制度変更に際し、制度全体の将来像について共有することが前提として重要。
「ヒグマのいる場所をリスク回避する仕組みのもと歩く機会が確保される」
- 平成 26 年以降を見据えた議論をするためには、将来像を共有した上で増枠の実施によるメリット、デメリットを整理し、枠の設定を最適化する必要性がある。引率者数や遭遇時ルール、養成方法等の要素を勘案する。
- 増枠について来年度の実施を目指すのであれば、手続き上先行して議論が必要。事務局内での意思統一を図り事務局会議内で整理を進め、次回部会にて再度討議する。

議題2 平成 24 年度登録引率者登録試験について

2-1. 平成 24 年度知床五湖登録引率者登録試験結果

2-2. 登録引率者試験の実施経過

資料説明

- 基本的には昨年度と同様の仕組みで説明会、筆記試験、実地試験を実施
- 筆記試験は 29 名が受験、28 名合格。実地試験は 8 名が受験 (20 名は免除)、7 名が合格)。最終的に 27 名が登録資格を得た。

質疑

- 2 回連続で不合格だった者が、3 回目に合格したとして、問題はないのか。なんらかのフォローアップが必要では。落とすための試験でなければ、養成の仕組みとセットで考えるべき。
- 個人の資質や適正に依存する部分もある。厚い研修をすれば解決するとは限らない。明らかに適性を欠く者について、参入を認めない仕組みがなければ制度全体の質を低下させる恐れ。
- 必要な知識の習得と確認という目的で筆記試験は有効に機能。ただし、ミスに対する許容度が低く、うっかり不合格があり得る。問題作成の難しさもあり工夫が必要。(30 問中 3 問がうっかりの範囲だろうという意見も有り。)

まとめ

- 本年度の試験結果を承認。
- 実地試験に総合評価を加えるなどの改善は、引率者の適性を評価する仕組みとして機能

した。選抜方法と合否結果については、おおむね妥当。

- 筆記試験の当落ラインも妥当。ただし筆記試験についてはガイド協議会などが主催する有料の講習会の後、追試の設定をするなどの策を検討する必要有り。

議題3 その他・次回予定など

3-1. 平成25年度登録引率者新規養成のカリキュラムと募集

- 次年度の引率者養成については例年通り4月ごろ募集開始見込。養成カリキュラムのありかたについては、今冬の準備事項となるが、早めに見通しをつけ公表することが新規参入障壁を下げる。
- 一方で、平成26年度からの制度改変を反映した養成カリキュラムとしなければならない。

3-2. 次回予定について

- 1) 事務局会議 12月3日 13:30ー 斜里町役場
- 2) 第14回審査部会 12月10日 14:00ー 知床世界遺産センター

3-2 第14回（平成24年度第2回）登録引率者審査部会実施結果

実施日時

平成24年12月10日(月) 14:00-17:00

実施場所

知床世界遺産センター レクチャールーム

議事次第

- (1) 来年度以降のヒグマ活動期の運用について
- (2) その他

出席者名簿

登録引率者審査部会構成員		
NPO 法人知床斜里町観光協会	新村 武志	
ウトロ自治会	梅沢 征雄	
知床ガイド協議会	山本 泰寛	
知床五湖登録引率者代表	松田 光輝	
同	若月 識	
エコツーリズム推進協議会	寺山 元	
自然公園財団	古坂 博彰	
事務局		
環境省ウトロ自然保護官事務所	上席自然保護官	野川 裕史
同	自然保護官	山岸 隆彦
北海道オホーツク振興局環境生活課	自然環境係長	大宮 久俊
斜里町役場 総務部環境課	課長	岡田 秀明
同	自然環境係長	高橋 誠司
運営事務局		
公益財団法人 知床財団	保護管理研究係 主任	葛西 真輔
同	保護管理研究係	能勢 峰
同	普及研修係	佐藤 舞子

議事概要

議題1 来年度以降のヒグマ活動期の運用について

資料 1. 知床五湖利用調整地区制度(ヒグマ活動期)設定変更に向けて

参考資料 1. 知床五湖利用調整地区制度(ヒグマ活動期)課題と評価

別紙 知床五湖利用調整地区制度(ヒグマ活動期)の運用状況と課題

事務局案

- 利用適正化計画(1 日立入上限、最大同時滞在団体数)は、平成 23 年度から 3 カ年の運用結果をもとに平成 26 年度からの変更とする。
- 平成 26 年度からの制度変更に向けて中期目標を設定し、平成 25 年度に現行制度下での実験・検証を行うことで運営システムの最適化、登録引率者の育成を目指す。

質疑・意見

- 10 年先の立入人数を予測した上で登録引率者の目標養成人数を決めるべきである。多くの人に利用機会を与えることが重要であるが、増枠しても登録引率者がいない状況は避けなければならない。
- リピーター等の一部の利用者には現制度は不評である。今後、継続的に五湖散策してもらうためには、散策所要時間短縮や増枠、小ループ散策、追い越し、同時滞在ツアー数の上限引き上げも含め何らかの提案が必要。
- 10 時、11 時台の需要の少ない時間帯のツアー料金を下げ、需要のある時間帯は上げることで、ツアー料金に差をつけてはどうか。
- 利用者にとって、増枠とルート選択性ではどちらに需要があるのか。そのほか需要のある時間帯等、利用者のニーズを明確にし、考慮することが制度改定において必要。
- ヒグマ活動期の小ループの利用も検討した、登録引率者のランクを下げた小ループ専門の引率者を養成するプログラムがあってもよいと思う。
- 今年の継続的な植生保護期のヒグマの出没により、追い払い等の対策または、ヒグマ活動期の期間延長の必要性も指摘されるが、今年のヒグマ出没の状況は異常であり、来年は例年通りに戻る可能性もあるため、来年度の利用期間は安易に変更すべきではない。
- 初回(8:10～)の 1 ツアーのみ、散策所要時間を短く設定してはどうか。追い越しもなく、その後出発するツアーやシステムにも影響はない。

資料 2. 知床五湖利用調整地区制度(ヒグマ活動期)平成 25 年度実験について

事務局案

- 散策所要時間を現行の 2 時間 20 分から 2 時間への短縮案(立入枠設定が最大 32 枠まで)。
- 立入許可枠(事前申請、認定枠との調整必要)による増枠案。

- 実験における確認事項は、立入枠の確定、本部運営状況、当日受付の運営状況、登録引率者のツアー実施状況、利用の質・利用者の感想等とする。
- スケジュールは平成 25 年 1 月までに実施概要を検討の上、4 月までに必要とされるシステム変更、予約開始。ヒグマ活動期に実験を実施、8 月から実験結果の検証。12 月までに平成 26 年度以降の中期目標の設定し、平成 26 年度運用案を調整、あり方協議会の認証を経て各種手続きを終了。平成 26 年度新運用開始を見据える。

質疑・意見

- 散策所要時間短縮などにより利用者が増加し、32 枠(各 10 名)すべてが定員に達した場合、1 日の上限 300 人を超えてしまうため、現行制度では同行者の上限数を減らす必要がある。
- 少人数引率の際の散策時間短縮は可能である。しかし、現状としてガイド 1 名で 10 名を引率する場合、安全を確保しながら短時間で散策することは困難であり、ガイドによって認識も異なっている可能性がある。
- 現行枠の 10、11 時台の込み合わないツアー時間帯に 1 日最低 1 本だけ当日受付限定枠を確保させて欲しい。協議会カウンターの赤字運営を避け、且つ、当日散策者のニーズに応えることができる。一方で繁忙期における当日受付限定枠の設定は、全体枠から需要がある予約ツアー 1 枠を失う可能性があり、どの時間に設定するかは登録引率者と調整させて欲しい。
- 2 コース(大ループ・小ループ)併用運用してはどうか。追い越しが必要となる場合もあるが、利用適正化計画で定める規制内容として追い越し禁止に踏み込んでないため、将来的に実現される可能性はある。
- 追い越し可能ということは、現行制度のツアーの出発間隔(最低 10 分間)にこだわる必要がなくなるのではないか。
- 平成 25 年に再度モニターツアーを行う場合、現状の利用者の大半を占める道外の利用者のツアー感想を聞くためにも、ツアー料金を徴収できるようにし、実際の運用に近づける必要がある。
- 試行実験の際に、立入許可枠を利用した立入は可能である。しかし、代表者申請の適用の有無など詳細確認が必要である。また、立入許可枠は立入認定手数料も発生しないため、有料の立入認定手続きと比較され、結果として混乱を招く恐れがある。
- 2 コース併用実験については、D 地点の合流に関するルール、追い越しの有無、予約システムの変更、本部役に徹する FH スタッフ増員の必要性がある。

まとめ

- 平成 25 年度の運用は、現行の立入枠・立入人数のままで変更なし。
- 平成 26 年度の新運用に向け、平成 25 年度に試行実験を実施予定とする。
- 平成 25 年度における試行実験について、大ループ 2 時間ツアー、許可枠を利用した同時滞在 12 枠設定、小ループなどの別ルート併用、追い越しなど、4 点に関する内容を検討。

次回部会において事務局が実験案を提示。

- 散策時間短縮、追い越しなどの制度変更に対し、登録引率者の意見の相違が確認されたため、いったん保留とし、次回部会までに共通意見を提示する。
- 登録引率者、フィールドハウス本部の役割を再定義:「登録引率者は、同行者に対する責任者、施設・制度に関する利用者」「フィールドハウス本部は、無線連絡を受け情報を整理共有する役割」
- 現制度における課題:「ヒグマ遭遇時の対応マニュアル」、「散策時間・料金」、「プライベートガイド等の設定」、「昼時間の利用機会の提供方法」、「食べ物の持ち込みと食事」

議題2 その他・今後の予定など

第15回審査部会 1月下旬 14:00ー 知床世界遺産センター

3-3 第15回（平成24年度第3回）登録引率者審査部会実施結果

実施日時

平成25年1月22日（火） 14:00-16:30

実施場所

知床世界遺産センター レクチャールーム

議事次第

- (1) 平成25年度ヒグマ活動期における試行実験について
- (2) 平成25年度登録引率者養成について
- (3) その他

出席者名簿

登録引率者審査部会構成員		
知床ガイド協議会	山本 泰寛	
知床五湖登録引率者代表	松田 光輝	
同	鈴木 謙一	
同	若月 識	
エコツーリズム推進協議会	寺山 元	
自然公園財団	古坂 博彰	
事務局		
環境省ウトロ自然保護官事務所	上席自然保護官	野川 裕史
同	自然保護官	山岸 隆彦
北海道オホーツク振興局環境生活課	自然環境係長	大宮 久俊
斜里町役場 総務部環境課	課長	岡田 秀明
同	自然環境係長	高橋 誠司
運営事務局		
公益財団法人 知床財団	保護管理研究係 主任	葛西 真輔
同	保護管理研究係	能勢 峰
同	普及研修係	佐藤 舞子

議事概要

議題1 平成 25 年度ヒグマ活動期における試行実験について

4 つの実験案(①2 時間コース運用実験、②追い越し実験、③2 コース併用実験、④増枠実験)が事務局より提示され、優先的に実施すべき実験項目の選出のための意見交換が行われた。

協議の結果、平成 25 年度のヒグマ活動期の試行実験では増枠実験を実施する方針となった。平成 25 年度の実験結果より課題を抽出・検証の後、平成 26 年度に利用適正化計画の変更を含めた増枠の本格運用を目指す。追い越しや 2 コース運用等のツアー内容の多様化は、平成 26 年度以降の運用で実験を行い、見直しに取り組む方針が話し合われた。

意見

【増枠実験について】

- 昨年よりも長期間の増枠実験がのぞましい。
- ツアー出発枠が増えただけでは、ガイドが朝と午後に集中し、散策の需要があるのにガイドが手配できない場合があるので留意すべき。
- 引率者が希望した増枠の時間設定を希望する。具体的には、朝の混雑時間帯は 10 分ごとに 10 ツアーまで出発可能とし、昼などの比較的ニーズの低い時間帯は 30 分ごとに出発可能とするといふ。
- 当日受付サービスを向上させるため、ガイド協議会の当日紹介枠として増枠分のうち 2～3 枠確保することが必要。

【その他の実験案について】

- 2 時間コースや増枠は、フィールドハウスの運用は比較的容易。追い越しや 2 コース案では、運用体制やリスク回避の仕組みを根本的に見直す必要を感じる。
- 散策時間を短縮設定した場合、追い越しの必要がなくなる場合がある。仮に、時間制限などの制約のない状態で散策可能な制度を設定するのならば追い越しが必須。
- 何度も追い越しがあることは望ましくない。せめて、追い越しの場所を限定すべき。
- 現状植生保護期は追い越しがある。体験の質が落ちるというなら、両期のツアー料金が同じ設定だと違和感がある。
- 2 コース併用が実現できるならば、ヒグマ活動期のヒグマ出沒による全面閉鎖を減らすことを期待。例えば、植生保護期と同様に、ヒグマ活動期に 3 湖奥でヒグマが出沒した場合、大ループは閉鎖であっても小ループは開放・利用できる可能性がある。

【実験全般に関して】

- 現行制度において 10 年先の客層を獲得し続けることは困難。刻々と変化する将来のニーズに応えるべく、散策者の安全を最優先した環境下において実施可能なツアー内容等を考え

備えておくことが重要。

- 制度検討はこれまで安全性と体験の質という軸で検討してきた。利用者ニーズの多様性に応えるという方向性は、ある程度時間をかけて取り組むべき。
- 利用者のニーズに応えるためには、制度だけでなく引率者のスキルアップや意識の向上が必須。現状の利用者のツアー選択の際の参考項目が、散策の時間帯や所要時間とガイド料金の安さ中心であることは望ましくない。
- ツアー内容の自由度が高まれば、引率者の責任も増す。危機管理についての研修などが引率者に求められる。
- ヒグマ出没時など、実験期間中に実行不可能であると判断された実験内容に関しては、実験の一部の案を修正・終了できるような柔軟な体制が望ましい。
- 現行の散策制度は「人を見たら逃げるヒグマ」を前提に内容が決定した。人に慣れたヒグマが増加してくれば、前提が崩れ登録引率者の研修等の内容を改める必要がある。ヒグマが人に慣れる可能性を受け入れた状態でヒグマ中心に人が対応するのか、または人慣れしないように積極的に何か対策すべきか決めることが急務。

議題2 平成 25 年度登録引率者養成について

今年度の研修内容をベースに、引率者の位置づけ変更に伴う危機管理研修を追加した事務局案が提示された。以下について検討の上、次回引率者部会で募集要項を決定する見込み。

- 登録引率者の資格更新は現在毎年実施している。ゴールド免許のように長期更新が可能とするか。
- 現行では一定数のツアーを実施している引率者は実地試験を再受験することが無い。実地試験も数年おきに受験を必須とすべきか。
- より多くの人が引率者研修を受ける環境を整えるため、各研修実施機関が費用や日程を調整する。

3-4 第16回（平成24年度第4回）審査部会実施結果

実施日時

平成25年3月19日（火） 14:00-17:30

実施場所

知床世界遺産センター レクチャールーム

議事次第

- （1）平成25年度ヒグマ活動期における試行実験について
- （2）平成25年度登録引率者養成について
- （3）その他

出席者名簿

登録引率者審査部会構成員		
知床ガイド協議会	山本 泰寛	
知床五湖登録引率者代表	松田 光輝	
同	鈴木 謙一	
同	若月 識	
エコツーリズム推進協議会	寺山 元	
自然公園財団	古坂 博彰	
事務局		
環境省ウトロ自然保護官事務所	上席自然保護官	野川 裕史
北海道オホーツク振興局環境生活課	自然環境係長	大宮 久俊
斜里町役場 総務部環境課	課長	岡田 秀明
同	自然環境係長	高橋 誠司
運営事務局		
公益財団法人 知床財団	保護管理研究係 主任	葛西 真輔
同	普及研修係 主任	秋葉 圭太
同	普及研修係	佐藤 舞子

議事概要

議題1 平成 25 年度ヒグマ活動期の試行実験について

- ・登録引率者代表からヒグマ遭遇時の中止・継続判断に関する提案、平成 25 年度実験として2ルート併用実験、追い越し実験に関する提案及びルート内のポイントの再整理と表示について提案があった。
- ・事務局から同時滞在 8 組を最大 13 組、1 日最大 30 組とする増枠実験の実施要綱の説明が行われた。

討議結果は次のとおり

1)ヒグマ遭遇時の対応について

- ヒグマ遭遇時のルールについて
引率者から「ヒグマを見たら引き返す」を基本としながらも、「遭遇時に退避行動を行う必要がなく、ヒグマがその場から立ち去った場合にツアーの継続判断を行えるようにする」という規定を追加する提案があったが、ヒグマの遭遇時のフローに低リスク時の引率者判断での継続については記述されており、この提案については追記の必要がないことが確認された。継続判断の規定を明示することよりも、個別の判断を記録し、積み上げ、ケーススタディミーティング等の場における議論を通じて、引率者と管理者の共通認識を涵養することが重要であることを確認。
- 登録引率者とフィールドハウス本部の関係の整理について
現場での中止・継続の判断について登録引率者の判断を尊重し、本部は情報整理と伝達を行う。

2)平成 25 年度のヒグマ活動期実験について

- 小ループ利用の実験を実施
実施期間:5月 10 日～5月 31 日、またはヒグマ活動期のいずれかの期間。2湖展望地に立ち寄らないルートで、当日受付枠(10:00 の回、14:00 の回)のみ実施する。状況に応じて、中止する可能性あり。
- 増枠実験を実施
実施期間:6月 1 日～7月 31 日。立入許可を利用した増枠。同時滞在の上限 8 組から上限 13 組に設定(1日 25 枠から1日 30 枠へ増枠。30 枠中 20 枠が認定枠、10 枠が許可枠)。
- 追い越し実験の実施
実施期間:短期間で 3 回程度に分けて実施。各回の実施後ミーティングを行い検証する。2湖展望地を通過しない小ループの利用の実験の際のみに発生する可能性あり。
- 実験時にFHスタッフを増員する場合、増員の効果を検証できるように、総合案内に配置

した場合、または当日受付に配置した場合などの仕事分担のパターンを実践し、運用結果を記録する。

- ツアー中止の際の再利用券の発行や後日の支払いにおける利用は、許可枠、認定枠両方に適用可能にする方針で今後調整。適用については、経理に関して整理が必要。ただし、許可枠の再利用券については植生保護期には持ち越さない。
- 実験によるヒグマへの影響を把握するため、センサーカメラによる定点撮影やヒグマ遭遇アンケートを活用し結果を記録する。

3) 地上遊歩道の地点明示について

- 現行の地上遊歩道の地点名の見直しと再設定
ヒグマ出没などの緊急時に現在地などを正確に把握するため、現行のルートに沿った地点名を設定し、設定間隔よりも詳細に設置するものとした。地点名の設置様式は簡易なものとし、詳細は後日、知床財団、登録引率者らと協議する。

議題2 平成 25 年度登録引率者養成について

- ・事務局から、登録引率者新規養成について、新たな研修項目として登録引率者の責任の確認やリスクへの備え、事故時の対応に関する危機管理研修を加えるなどを案とした平成 25 年度募集要領(案)が提示された。

討議結果は次のとおり

- 事務局案について概ね合意。日程の設定、講習費用について知床財団、ガイド協議会と調整を図り、募集を開始する。
- 今後の運用変更には研修内容や試験方法の再検討が必要。養成においてベテランから新規養成者へ経験を伝える方法が必要となる。

議題3 その他

- ・「知床五湖登録引率者」という名称について、登録引率者がプロガイドとしてツアー時の現場責任を持つのであれば、登録ガイドと改名してはどうかとの提案が知床エコツーリズム推進協議会よりあった。
- ・これに関し、事務局より引率者の養成研修・試験において知識的なガイド技術に関し扱っていないこと、ヒグマ活動期において安全を確保しながら引率するという役割であることから「引率者」のままでもいいという説明が行われた。

次回

- 次回のあり方協議会で本日の協議結果を報告。
- 個別協議を行い、事務局で実験要綱を概ね確定させる。

4. 知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズム検討会議カムイワッカ部会の運営

平成 24 年度の知床世界自然遺産地域適正利用・エコツーリズム検討会議カムイワッカ部会は、平成 25 年 3 月 26 日に、斜里町で開催した。

会議前の主な業務は、事務局の予定を聞き取った上での会議開催日の調整、会議場の手配、部会構成員への出欠確認を行い、出席者名簿作成、会議資料の印刷、及び座席表作成等である。会議当日には、座席表に合わせた机の配置、ネームプレート設置、及び音響機器の設定を含む会場の設営を行った。また、札幌から招聘した専門家 1 名の空港から会場までの送迎を行った。会議後には、専門家への旅費、及び謝金の支払いを行ったほか、議事録を作成した。

4-1 第1回（平成24年度第1回）カムイワッカ部会実施結果

実施日時

平成25年3月26日（火） 10:00－12:00

実施場所

斜里町公民館 ゆめホール知床 第一会議室



写真 4-1. 第1回カムイワッカ部会の様子

議事次第

- （1）カムイワッカ部会の設置について
- （2）平成24年度事業の実施状況報告・モニタリング結果報告
- （3）平成25年度計画について
- （4）その他

出席者名簿

出席者名簿

機関名	職名	氏名
【専門家】		
北海道大学大学院農学研究院	准教授	愛甲 哲也
北見工業大学 社会環境工学科	准教授	伊藤 陽司
【地域関係団体】		
知床自然保護協会		遠山 和雄
斜里山岳会	理事	滝沢 大徳
北見地区バス協会、斜里バス	常務取締役	下山 誠
NPO 知床斜里町観光協会	副会長	松田 光輝
知床斜里町観光協会ウトロ部会		<欠席>
羅臼山岳会	会長	佐々木 泰幹
知床温泉旅館組合	組合長	佐々木 富美男
知床民宿協会	会長	小野寺 猛
ウトロ自治会		<欠席>
株式会社ユートピア知床	社長	上野山 文男
株式会社ユートピア知床	専務	千葉 修
北見地区ハイヤー協会、斜里ハイヤー		<欠席>
一般財団法人自然公園財団知床支部	主任	古坂 博彰
【関係行政機関】		
北海道開発局網走開発建設部	技術管理課	<欠席>
北海道開発局網走開発建設部	道路計画課	<欠席>
北海道運輸局北見運輸支局	首席運輸企画専門官	<欠席>
北海道警察北見方面本部	交通課	<欠席>
北海道警察斜里警察署	地域・交通課長	小川 清隆
【事務局】		
環境省 釧路自然環境事務所	次長	中山 隆治
環境省 ウトロ自然保護官事務所	上席自然保護官	野川 裕史
環境省 ウトロ自然保護官事務所	自然保護官	山岸 隆彦
北海道森林管理局 網走南部森林管理署	流域管理調整官	栗谷川 徹

北海道森林管理局 知床森林センター	所長	南 達彦
北海道森林管理局 知床森林センター	企画官	石崎 峰孝
オホーツク総合振興局 網走建設管理部	管理課長	工藤 雅史
オホーツク総合振興局 網走建設管理部	管理第二係長	藤山 真敏
オホーツク総合振興局 網走建設管理部	道路第一係長	高橋 英二
オホーツク総合振興局 網走建設管理部	主任	志村 亮
オホーツク総合振興局 保健環境部	自然環境係長	大宮 久俊
斜里町役場 総務部	環境課課長	岡田 秀明
斜里町役場 総務部	環境課自然環境係長	高橋 誠司
斜里町役場 産業部	商工観光課観光係長	伊藤 智哉
【運営補助】		
公益財団法人 知床財団	事務局次長	寺山 元
公益財団法人 知床財団	普及研修係主任	秋葉 圭太
公益財団法人 知床財団	普及研修係	喜内 理恵

議事概要

進行:斜里町環境課 岡田課長

(1) カムイワッカ部会の設置について

- 冒頭に環境省中山次長より開会のあいさつ
- カムイワッカ部会の立ち上げと設置要領について、資料 1、参考資料 1-1、1-2 を内容に沿って事務局(環境省 野川自然保護官)が説明。
- カムイワッカ部会は、適正利用・エコツーリズム検討会議を親組織とし、地域別の課題を検討する部会として設置。従来、別々の場で議論されてきたマイカー規制、カムイワッカ湯の沢の利用、道道の特例使用制度等のカムイワッカ地区に関する諸課題について、全体を束ねた検討の場を新たに設置することになる。有識者については、特定の専門家に委嘱せず、必要な専門分野に応じてその都度招聘することとしたい。また、羅臼湖部会等と同様に座長は置かず、事務局が課題に応じて構成団体を召集し、議事進行していく運営を想定している。

質疑応答

環境省(野川):構成団体に知床ガイド協議会を加えるべき、という提案が事前に事務局にあった。この件について承認頂けるか。

一同:承認

知床自然保護協会(遠山):道路利用に関する当部会の取り扱い範囲を確認したい。幌別ゲートからカムイワッカに至る道道知床公園線の利用のあり方全般を対象とするのか。もしくは、車両規制が実施されている五湖ゲートからカムイワッカ間に限定するのか。

環境省(野川):車両規制の実施区間のみでなく、幌別ゲート以奥における自動車利用の適正化についての課題は本部会で取り扱う。

進行(岡田):異議なければ、適正利用・エコツーリズム検討会議の下に個別部会としてカムイワッカ部会が本日から設置されるがよろしいか。

一同:承認

(2) 平成24年度事業の実施状況報告・モニタリング結果報告

- 本年度のマイカー規制の実施状況について、資料 2-1 を内容に従い事務局(環境省 野川自然保護官)が報告。
- カムイワッカおよび知床五湖駐車場の渋滞予測のシミュレーション結果について、北海道大学愛甲准教授より資料 2-2 に従い報告。

質疑応答

知床財団(寺山):参考資料 2-1 の5頁において、各地点の利用者数に係数を乗じて利用者数の予測を行っているが、係数の値について教えてほしい。

環境省(野川):道の駅の利用者数に対する五湖来園者数の比は概ね一定であり、そこから係数が求められる。また、知床五湖の利用者の何割がカムイワッカ地区を同時に利用するのか、といった選択率についても、五湖地区の駐車場台数とカムイワッカ林道への車両カウント数との比率が相關することから推定できる。詳細は、釧路自然環境事務所が実施した「平成 24 年度知床国立公園知床五湖・カムイワッカ地区自動車利用動態解析業務」で報告されている。後日知床データセンターに掲載するので参照して欲しい。

なお、五湖地区利用者におけるカムイワッカ地区の選択率は昨年度より上昇している。その理由として、カムイワッカ地区へのアクセスについて認知度が上昇した点、知床五湖の地上遊歩道の長期閉鎖が発生した点が考えられる。選択率は年変動が大きく、数年間モニタリングする必要がある。

知床財団(寺山):選択率の変動は情報提供の影響が大きいと考えられる。情報提供の手法とともに検討していく必要がある。

斜里山岳会(滝澤):硫黄山登山者の駐車方法は、日帰り登山か縦走登山かで大きく2パターンに分かれ、駐車時間にも違いがある。縦走登山者は事前に車両をカムイワッカへ駐車しに来ることから一泊二日の縦走登山でも最低3日間、二泊三日ならば4日間駐車することとなり、駐車場所を長時間占有してしまう。今後縦走登山者の駐車場所をどうするかが課題である。日帰り利用者と駐車場所を分けることで問題解決できる可能性がある。登山者の行程や目的地については把握しているか。

環境省(野川):ウトロ自然保護官事務所としても、混雑日には、現場で登山者による車両駐車台数を確認している。シーズンで最も混雑した7月 15 日には、湯の沢の駐車スペースで登山者の車両が 11 台確認されたが、そのほか5台ほどが湯の沢駐車スペースではなくカーブミラーNo.5付近に駐車していた。このように湯の沢駐車帯から少し離れた場所に登山客が駐車すれば、渋滞緩和に効果的と考える。なお、この3連休において登山者の駐車車両ごとの登山行程については把握していない。新噴火口までの往復登山者だとしても4時間程度の駐車が想定され、30分程度の利用である一般の湯の沢利用者の8倍の滞在時間であり、登山客の駐車場所についてはこれから検討が必要である。

斜里山岳会(滝澤):歩ける距離であれば、登山者の駐車場所を少し離すことについて、登山者の理解は得られるのではないか。

斜里町(岡田):長時間駐車する人は、誘導がなくとも自発的に湯の沢駐車帯から離して駐車しているのか。

環境省(野川):現地には、登山者専用駐車帯以外は駐車しないように、もし専用駐車帯が満車の場合は離れた場所に駐車するようという案内掲示はあるが目立たない。具体的な場所も明示されていない。

斜里町(岡田):案内掲示などで誘導がうまくいけば渋滞は多少緩和されるという結論かと思う。

知床財団(寺山):現場の実感として、誘導がうまくいけば渋滞は緩和されるだろう。実際、混雑日において、登山客が荷物をゲートの近くまで車で運んだあとに湯の沢駐車帯から離れた場所に駐車した事例もあった。そのため現場への人員配置が重要である。

- 五湖ゲートーカムイワッカ間の道道知床公園線における交通事故発生について、斜里警察署小川課長より報告。
- 5件の単独物損事故が発生した(1件の事故では負傷者が発生し救急車搬送されたが、最終的に診断書は作成せず、物損扱いとなった)ほか、駐車スペースでの物損が1件あった。
- 事故の傾向は、夕方の発生が多く、5件すべてレンタカー、道外居住者であった。交通事故の主な原因はハンドル操作の不適(レンタカー、砂利道)で、車の特性すら理解していなかった結果である。
- 知床五湖ーカムイワッカ間の距離および路面状況(砂利道)を考慮しても、事故率は比較的小さい印象である。ただし、最寄りの駐在所(ウトロ駐在所)から出動したとしても現地まで約30分かかる。状況に応じては、出動まで約一時間を要する。そのため、現場での様々な機関の協力をお願いしたい。また今回の渋滞情報等を参考にし、チラシなどを用いて事故防止啓発活動を来年度も行いたいので、協力をお願いしたい。

質疑応答:なし

- 道道の特例使用について、事務局(オホーツク振興局網走建設管理部管理課 藤山係長)が参考資料 2-2 の内容に従い報告。

質疑応答

斜里山岳会(滝澤):ガイド登山にあたっては、特例使用の申請書のみならず、登山計画書や入林届等、複数の書類を提出することとなる。今後、エコツーリズムの観点からも、各種手続きを一本化できるように検討をお願いしたい。

- カムイワッカ湯の沢の利用状況について、事務局(斜里町役場商工観光課 伊藤係長)が資料 2-1、参考資料 2-3 の内容に従い報告。
- カムイワッカ湯の沢の雨量観測および岩塊の崩落、浸食状況のモニタリング調査結果について、北見工業大学伊藤准教授が資料 2-3 の内容に従いパワーポイントを用いて報告。

質疑応答

知床財団(寺山):一の滝の規制ラインまで遡行してきた利用者数は把握しているか。滝の中を歩く体験を選ぶ人の選択率が議論できるのではないかと思うので、もしデータがあれば今後の協議の

場に出して頂きたい。

斜里町(阿部) : 常駐監視員配置期間においては、規制線を突破した人数の把握は行っているが、一の滝まで遡行してきた利用者数のカウントはしてはいない。立ち入り規制線到達人数までは把握していない。今後、そうした情報の必要性も含めて検討したい。

斜里山岳会(滝澤) : 伊藤准教授の発表において、「規制線を突破して湯の沢の上部に登山者が登っている」旨の発言があったが、カムイワッカ湯の沢は登山ルートとしては一般的でない。新噴火口に抜けるのも困難。

ただし、カムイワッカ湯の沢をバリエーション的な沢登りのルートとして取り扱う、という観点での議論はあり得る。その際には、登山者と一般的な湯の沢利用者とは当然、安全意識やレベルに差があるので線引きが必要となるだろう。将来的な課題として提起したい。

(3) 平成25年度計画について

- カムイワッカ地区自動車利用適正化対策について事務局(環境省 野川自然保護官)が資料3に従い内容を説明。
- 道道特例使用(硫黄山登山口の利用)について、事務局(オホーツク振興局網走建設管理部管理課 工藤課長)より補足説明。平成26年度より現地管理員の配置予定はないため、道道特例使用申請の事前申請の徹底を周知したい。ただし、平成26年度も現地に申請記載台と投函箱は設置する予定であり、無人の当日受付も可能とする予定。
- カムイワッカ湯の沢の利用について、事務局(網走南部森林管理署 栗谷川流域管理調整官)より補足説明。開放エリア等については本年度と同様の取扱いを想定。現地の管理体制については、今後関係機関で協議した上で決定したい。

質疑応答

知床財団(寺山) : 車両規制のあり方については期間等の見直しを検討し、平成26年より次期計画をスタートさせる、との説明があったが、その検討はどの場で協議するのか。エコツーリズム・適正利用検討会議か、当部会か、作業部会か。また、議論のスケジュール等についての予定は決まっているか。

環境省(野川) : 資料1を用いて説明。車両規制の見直しは、当部会において議論し、次期計画を検討していく。カムイワッカの自動車利用適正化対策連絡協議会は当部会での決定事項を実行する場であり、エコツーリズム検討会議に対しては、当部会での決定事項を報告する場と位置付けている。

知床財団(寺山) : カムイワッカ部会の開催スケジュールや頻度について決まっている点があれば知らせていただきたい。

環境省(野川) : マイカー規制は、道路交通法の規制を利用するので公安委員会への申請が必要

であり、その申請の期日をみて進めていく。

知床財団(寺山)：制度の変更に際しては、早めに決定しなければ現場が混乱する恐れがある。制度の周知といった観点からも次期計画策定のスケジュールの設定をお願いしたい。

知床温泉旅館組合(佐々木)：次期計画の決定時期の見通しをお知らせいただきたい。実施の半年前には概要が決定している必要がある。

斜里町(岡田)：半年前に決定というスケジュールならば、年内に決定する必要がある。

知床斜里町観光協会(松田)：カムイワッカ部会の位置づけについて再度確認したい。今後部会の中で、「幌別以奥の自動車利用適正化対策」、「カムイワッカ湯の沢の利用」、「カムイワッカ～硫黄山登山口の道路利用」の3つの事業そのものについて報告、議論をするのか。それともカムイワッカ地区の利用のあり方について、新たな提案を受けて議論する場なのか。

環境省(野川)：資料1を用いて説明。「幌別以奥の自動車利用適正化対策」、「カムイワッカ湯の沢の利用」、「カムイワッカ～硫黄山登山口の道路利用」は相互に関係しあい、連携した施策が必要である。そのために設置された部会と認識していただきたい。それぞれ決まったことをそれぞれの実施主体で行っていただく。カムイワッカ部会で決まったことは、必ずエコツアー検討会議の場で情報共有していくという形になる。

(4) その他

- 環境省野川より餌やり禁止キャンペーンのロゴマークについて説明。詳細について、知床斜里町観光協会松田より説明。
- ロゴマークマグネットを車に貼る、知床峠開通に合わせてチラシを配布するなどして餌やり禁止を訴えていく予定。今後の具体的な事業については環境省や斜里町と詰めていく。皆さんにはぜひご協力いただきたい。
- 知床森林センター南センター長より、4月1日より国有林野の一般会計化に伴い、知床森林センターが知床森林生態系保全センターに移行する旨の説明が行われた。

【次回開催予定】

マイカー規制協議会後。5月下旬～6月頃

5. 学識経験者への聞き取り調査

学識経験者への聞き取り調査は、知床五湖・カムイワッカ地区の適正利用に関し調査研究を実施している北海道大学大学院農学研究院 愛甲哲也准教授と同大学院 庄子康准教授に対して、平成 25 年 1 月 18 日 に札幌で実施した。聞き取り調査に際しては、事前に担当自然保護官と打ち合わせを行い、聞き取り調査の方針・聞き取り項目の事前整理を行った。

聞き取り調査の結果および別途業務で行っているモニタリング結果の評価及び助言をとりまとめ、第 28 回知床五湖の利用のあり方協議会の資料1を作成した。

(1) 事前打ち合わせ概要

聞き取り調査の方針および聞き取り項目の事前整理を行った。

実施日時

平成 25 年 1 月 16 日(水)15:00-17:00

実施場所

ウトロ自然保護官事務所

出席者

ウトロ自然保護官事務所 野川裕史上席自然保護官
公益財団法人知床財団 普及研修係主任 秋葉圭太

(2) 聞き取り調査概要

北海道大学大学院農学研究院 愛甲哲也准教授と同大学院 庄子康准教授に、平成 24 年度に実施された 3 つの調査(「知床国立公園知床五湖・カムイワッカ地区自動車利用動態解析」、「知床国立公園知床五湖における利用者意向等調査」、「知床国立公園知床五湖植生・歩道状況調査」)の手法の点検と評価および改善点などの助言を求めた。また、既存データの活用や解析方法のアイデアおよび平成 25 年度の事業の変化を見据えた調査の企画、提案を求めた。

実施日時

平成 25 年 1 月 18 日(金)10:00-12:00

実施場所

北海道大学農学部本館

出席者

北海道大学大学院農学研究院 愛甲哲也准教授

北海道大学大学院農学研究院 庄子 康准教授

公益財団法人知床財団 普及研修係主任 秋葉圭太

聞き取り項目

- 平成 24 年度各調査の全体評価とコメント
- 各調査の手法の点検と評価、改善点
- 平成 25 年度の必須事項について
- 既存データの活用と解析方法のアイディア
- 平成 25 年度の事業や変化を見据えた調査の企画・提案

聞き取り調査結果(敬称略)

1. 平成24年度 知床国立公園知床五湖・カムイワッカ地区自動車利用動態解析業務の調査結果について

1) 五湖地区の入り込み状況について

(愛甲)

8月を除けば五湖地区全体の入込数は増加しているが、観光船や知床自然センターなどの他施設の入込数と対比させなければ評価できない。特に、マイカー規制期間外のカムイワッカ地区との比較は重要。

8月の高架木道の利用者数増加は、地上遊歩道閉鎖の影響が大きい。全期間でみても高架木道の利用者数は増加している。一方、10月の来園者数増加率と比較し、8月の伸びは小さい。地上遊歩道が閉鎖しているために、どこか別の(知床地区内の)観光地に移動したのかどうか。そもそも知床に来訪しなかった可能性もある。地上遊歩道閉鎖の影響を評価するためには、来園者数のみならず、五湖そのものの来訪を回避した利用者層をフォーカスする必要がある。天候等の要因も影響するため、知床自然センターなどの他施設との入込比較が必要である。

(庄子)

団体ツアー客の多くは高架木道利用であり、個人客は地上遊歩道の利用が多い。団体の減少を食い止めたのか、個人の利用を伸ばしたいのかに応じて今後の対応は異なる。

五湖地区の入り込み数は、ヒグマの出没や遊歩道の開閉等の複数の要因に影響されている。各要因の影響の多寡を評価するためには、五湖と利用形態や環境変化が競合しない、観光船などと比較する必要がある。

2) 五湖の渋滞発生状況について

(愛甲)

今年は、特定日のみ深刻な渋滞が発生している。ただ、8月に関して言えば、地上遊歩道がもっと開放していれば滞在時間が延長するため、渋滞状況が変化した可能性がある。平成23年度並みの閉鎖状況で本年度と同様の入込があった場合、渋滞が深刻化する公算が強い。

渋滞緩和のために、混雑時間を避けるような情報提供が必要。全体の2割程度の利用者がこうした行動をするためには、五湖以外での情報提供の仕方、道路上の掲示等の検討も必要。(株)ドーコンが、道の駅で渋滞情報を知らせたら渋滞緩和にどの程度効果があるのかという調査を行っているので、この事業との連携も検討すべき。

3) カムイワッカ地区の入り込み状況と交通渋滞について

(愛甲)

マイカー規制期間外において、明らかに五湖地区とカムイワッカ地区の利用には相関がある。五湖の地上遊歩道が閉鎖すると、カムイワッカが混雑する関係性がある。

カムイワッカ地区の利用者の平均滞在時間は約20～30分と短く年変動もほとんど見られないが、カムイワッカ地区の渋滞を助長している大きな要因の一つは、登山者の駐車車両である。登山者の車の台数は、登山道の特例利用制度の期間延長の影響もあり年々増加している印象がある。カムイワッカ地区の渋滞の程度は、登山者の駐車台数に左右されると思う。マイカー規制によってカムイワッカ地区に自家用車で移動できないことが、五湖の渋滞を助長しているわけではないと考える。五湖地区とカムイワッカ地区はセットで観光することが多く、どちらを先に回るかの違いだと思う。ただし、カムイワッカ地区への移動時間で渋滞が吸収されている可能性もある。混雑していない方が利用者が選択することで渋滞は幾分緩和されるかもしれない。もし、繁忙期のマイカー規制を廃止すると、交通事故が多発する等、別のリスクも増加する。

また、カムイワッカ湯の沢が四の滝まで開放された場合、現在の2倍以上の滞在時間になる可能性があり、深刻な渋滞が発生する懸念がある。

4) 自動車動態調査の手法について

(愛甲)

簡便な手法として、10分間隔での(入場車両台数の積算値)－(退場車両台数の積算値)を記録することで五湖駐車場の車両台数が把握することができ、それが100台以上だと渋滞とみなすことが可能である。この方法で、五湖を利用する車両の動態を把握することが可能であると思う。こうした簡便なデータを用いて、入場車両台数のピークをずらすことにより、渋滞を緩和できるかどうか予測可能と思われる。

(庄子)

現在使用しているシミュレーションモデルの精度は、再現性が確認されており、信頼性はある。

5) 来期以降の調査企画、アイデアについて

(愛甲)

2009 年に作成した渋滞予測モデルを使用してみると、現在より五湖駐車場の容量を 20 台増加させて 130 台でシミュレーションすると渋滞はほぼ解消される。しかし、主に 10 時、14 時の渋滞が起こりやすい、ふた山を平準化しても同じような効果がある。全体の 2 割くらいの車両を時間的に分散させると渋滞の長さ、待ち時間も減少する。

2009 年モデルは、道道カムイワッカ線を考慮しておらず、これを含めたモデルの開発は可能。単純に五湖の駐車場を 130 台にしてもカムイワッカの渋滞がどうなるかは現在のプログラムでは分からない。

また、現在シミュレーションに使用しているプログラムは研究用の高度なものであるが、次年度は現場で活用できる簡便なプログラムを使用するアイデアもある。

(庄子)

シミュレーションをかけると、10 時と 14 時にピークができる。ピークを平準化することが一番良い。情報提供の手法についてソフト面の検討が必要。知床自然センターなどでの情報提供のあり方も再検討が必要。駐車場収容量を 30 台増やしたと仮定し、地上遊歩道を閉鎖していた場合、高架木道の混雑状況はどうなのか。混雑場所がシフトするだけではないか。駐車場の容量のみでなく、施設全体の容量がボトルネックとなる。

渋滞が起こる原因と増大する原因は別かもしれない。渋滞が起こる原因は車両台数で、増大する原因は滞在時間であると思う。

2. 平成24年度 知床国立公園知床五湖における利用者意向等調査業務の調査結果について

1) 地上遊歩道や高架木道の利用者の満足度について

(愛甲)

満足度については、絶対評価はできない。利用者本人が利用方法を自己選択したかどうかの前提が満足度に影響する。

①ヒグマ活動期のツアー参加の有無②植生保護期の地上遊歩道散策の有無③高架木道のみの利用の3つの属性を指標として解析すると相応のグルーピングができる。ヒグマ活動期のツアー参加者もしくは植生保護期の地上遊歩道利用者は女性、かつ道外からの利用者が多い。このような人は、自然観察や自然体験に興味がある人が多い。反対に、全期間通じて高架木道のみ利用する人は男性、かつ他者に連れられて来訪した人が多く、自然観察にあまり興味がなく、世界遺産に来られればよいという意識の人が多い。

2) 制度の認知度について

(愛甲)

制度の認知度は行動と結びついている。自分で地上遊歩道を利用しようという意思を持っている利用者は、事前に情報を収集しているため、認知度が高い。しかし、観光コースに組み込まれている、たまたま来訪した、といった利用者の認知度は元より低い。後者のような人にどれだけ周知のコストをかけるか、もしくはある程度割り切るかどうかは考える必要あり。しかし、高架木道のみを利用した人の約40%は、事前に地上遊歩道についてもっと知っていれば利用したかったと答えており、意欲の高い人へのフォローはすべきである。

また、ヒグマ出没により、高架木道のみを利用せざるを得なかった場合も多く、自己選択をしたかどうかは満足度にも関わる。しかし、今年のヒグマ出没・閉鎖状況が特異的なものであったのかどうかは、来年度の状況を見ないと分からない。

3) ヒグマ活動期の増枠実験とその評価について

(庄子)

増枠すると、長時間滞在者が増える。混雑解消という意味では、増枠した場合、駐車場を拡大しないと渋滞は増大するかもしれない。

(愛甲)

ツアー参加者の多くはガイドの車で来訪するし、当日参加者の割合もそう高くないため、駐車場の拡張よりも、時間的分散の方が渋滞緩和に効果があるかもしれない。

4) アンケート結果の解釈について(満足度・制度支持態度)

(愛甲)

満足度は、自分の旅行全体に対する評価になっていることが多く、概ね高く出る傾向がある。逆に、低い評価が全体の約1割いることに注意すべき。これ以上不満層を増やさないようにすることが大切。不満層は他者に話すことが多いので、クレームが多い印象が作られるかもしれない。否定的意見を持っている層は偏った特定の層か否か、具体的にどのような意見を持っているかを知る必要がある。クレームの内容が重要である。

アンケートの設問が「自然を満喫しましたか」という問いなので、五湖の来訪目的が自然体験でなかったならば、満足度が低い評価になる可能性がある。しかし、再訪意欲は有意に低いとはいえないので、「どちらともいえない」が増えるのは仕方がない。

5) アンケート調査の手法について(サンプル数)

(愛甲)

サンプル数よりサンプリング方法が重要。どういう日にどのような目的で調査を実施したかが大切。分析とも関係があるが、アンケートを行う目的を明確化することが重要である。目標設定によって手法も異なる。利用調整地区制度自体の評価を問うことを目的とするならば、利用者の満足度や混雑感をチェックすべきだろう。将来的な制度のあり方や観光の方向性を探ることを目的とするならば、マーケティングという要素を考慮したアンケートを実施すべきだろう。

(庄子)

担当者交代後も問題ないように、データの管理が重要。

6) 次年度以降のアンケート調査のあり方について

(愛甲)

制度が大きく変更になる際は、利用者アンケートを行うべきである。そうでなければ、3年に1回など、定期的にアンケート調査を行うことで十分であると思われる。

カムイワッカ利用との関係や情報提供のあり方などを含めたウトロ全体の観光をどうするかといった議論を行うことを目的とするならば、制度改変前後に行う単発的なアンケート調査を行うのと同時に、五湖を来訪しなかった観光客を含めた調査が必要。

3. 平成24年度 知床国立公園知床五湖植生・歩道状況調査業務の調査結果について

1) 優先的に保護すべき場所や種について

(愛甲)

モニタリング調査の結果からは、急いで保護すべき場所や種は認められない。ただし、遊歩道上に草本類の踏みつけに弱い種もいくつか存在しているので注意してモニタリングする必要がある。短期的には、利用者数や制度そのものよりも、融雪や降雨などの影響や倒木回避による踏みつけなどの影響が大きいと考えられる。

解説ポイントになるような場所、休憩ポイントなど利用者が立ち止まる場所やぬかるみが発生している場所、また傾斜がある場所は、注意が必要。こうした場所を継続的にモニタリングする必要がある。利用者が立ち止まる場所などはモニタリングサイトを設置すべき。

石川幸男先生にデータを見てもらい、助言を求めるべき。

2) 遊歩道の管理手法について

(愛甲)

毎年行っている、裸地と植生がある場所の境界を示すロープの設置場所は、雪解け直後には境界が明瞭でないこともあるため、非意図的に拡幅していることがよくある。毎年ロープを張る場所が変わらないように、杭を固定するなどの工夫が必要。

3) 来年度以降の調査のあり方について

(愛甲)

制度改変等がない限り、3年に1回程度の定期的な実施でよい。植生の変化はすぐに現れるわけではないので、手法をできるだけ単純化して継続的に行えるほうがよい。定点撮影等を用いた単純な手法でも変化は把握できる。ガイド等が調査に参加することもできる。

平成24年度 環境省釧路自然環境事務所 請負事業

事業名: 知床国立公園知床五湖等利用適正化検討業務

事業期間:平成 24(2012)年11月 20 日～平成 25(2013)年 3 月 28 日

事業実施者:公益財団法人 知床財団

〒099-4356 北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩尾別 531

知床自然センター内



表紙写真

平成 24 年度第 28 回知床五湖の利用のあり方協議会の様子

撮影日 2013 年 1 月 28 日

リサイクル適正の表示:紙へリサイクル可

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料[A ランク]のみを用いて作製しています。